

中国怪奇小説集

宣室志（唐）

岡本綺堂

青空文庫

第四の男は語る。

「わたくしは『宣室志』のお話をいたします。この作者は唐とうの張ち
ようどく 読よみ であります。張あざなは字せいほうを聖朋せいほうといい、年十九にして進士しんしに
とうだい 登第とうだいしたという俊才で、官しやうしよさじやうは尚書左丞しやうしよさじやうにまで登りました。
 祖父の張ちやうせん 薦せん も有名の人物で、張薦ちやうせんはかの『遊仙窟ゆうせんくつ』や『朝
ようやせんさい 野僉載ようやせんさい』を書いた張文成ぶんせいの孫にあたるように聞いて居りま
 す。

この書も早く渡来しましたので、わが国の小説や伝説に少なからざる影響をあたえているようでございます」

七聖画

唐の長安ちやうあんの雲花寺うんげじに聖画殿があつて、世にそれを七聖画と呼んでいる。

この殿堂が初めて落成したときに、寺の僧が画工をまねいて、それに彩色画さいしきがを描かせようとしたが、画料が高かったので相談がまとまらなかつた。それから五、六日の後、ふたりの少年がたずねて来た。

「われわれは画を善く描く者です。このお寺で画工を求めているということを知りまして。画料は頂戴するに及びませんか、われわれに描かせて下さいませんか」

「それではお前さん達の描いた物を見せてください」と、僧は言
つた。

「われわれの兄弟は七人ありますが、まだ長安では一度も描いた
ことがありませんから、どこの画を見てくれというわけには行き
ません」

そうになると、やや不安心にもなるので、僧は少しく躊躇ちゆうちよ
している、少年はまた言った。

「しかし、われわれは画料を一文も頂戴しないのですから、もし
お気に入らなかつたならば、壁を塗り換えるだけのことで、さし
たる御損もありますまい」

なにしろ無料ただというのに心を惹ひかされて、僧は結局かれらに描

かせることにすると、それから一日の後、兄弟と称する七人の少年が画の道具をたずさえて来た。

「これから七日のあいだ、決してこの殿堂の戸をあけて下さるな。食い物などの御心配に及びません。画えの具の乾かないうちに風や日にさらすことは禁物ですから、誰も覗のぞきに來てはいけません」
こう言つて、かれらは殿堂のなかに閉じ籠つたが、それから六日のあいだ、堂内はひっそりしてなんの物音もきこえないので、寺の僧等も不審をいだいた。

「あの七人はほんとうに画を描いているのかしら」

「なんだかおかしいな。なにかの化け物がおれ達をだまして、とうに消えてしまったのではないかな」

評議まちまちの結果、ついにその殿堂の戸をあけて見ることに
なつた。幾人の僧が忍び寄つて、そつと戸をあけると、果たして
堂内に人の影はみえなかつた。七羽の鴿はとが窓から飛び去つて、空
中へ高く舞いあがつた。

さてこそと堂内へはいつて調べると、壁画は色彩うるわしく描
かれてあつたが、約束の期日より一日早かつたために、西北の
窓ぎわだけがまだ描き上げられずに残つていた。その後、幾人の
画工がそれを見せられて、みな驚嘆した。

「これは実に靈妙の筆である」

誰も進んで描き足そうという者がないので、堂の西北の隅だけ
は、いつまでも白いままで残されている。

法喜寺の龍

政陽郡の東南に法喜寺ほうきじという寺があつて、まさに渭水いすいの西に當つていた。唐の元和げんなの末年に、その寺の僧がしばしば同じ夢を見た。一つの白い龍りゅうが渭水から出て来て、仏殿の軒にとどまつて、それから更に東をさして行くのである。不思議な事には、その夢をみた翌日にはかならず雨が降るので、僧も怪しんでそれを諸人に語ると、清浄の仏寺に龍が宿るといふのは、さもありそうなことである。そのしるしとして、仏殿の軒に土細工の龍を置いたらどうだという者があつた。

僧も同意して、職人に命じて土の龍を作らせることになった。

惜しむらくはその職人の名が伝わっていないが、彼は決して凡手ではなかつたと見えて、その細工は甚だ巧妙に出来あがつて、寺の西の軒に高く置かれたのを遠方から瞰みあげると、さながらまことの龍のわだかまつているようにも眺められた。

長ちようけい慶

の初年に、その寺中に住む人で毎夜門外の宿舎に眠る

ものがあつた。彼はある夜、寺の西の軒から一つの物が雲に乗るように飄ひようひよう々と飛び去つて、渭水の方角へむかつたかと思うと、

その夜半に再び帰つて来たのを見たので、翌日それを寺僧に語ると、僧もすこぶる不思議に思つていた。

それからまた五、六日の後、村民の齋ときに呼ばれて、寺中の僧は

朝からみな出てゆくと、その留守の間にかの土龍の姿が見えなくなつたので、人びとはまた驚かされた。

「たとい土で作つた物でも、龍の形をなす以上、それが靈ある物に變じたのであろう」

こう言っていると、その晩に渭水の上から黒雲が湧き起つて、次第にこの寺をつつむように迫つて来たかと思はれるうちに、その雲のあいだから一つの物が躍り出て、西の軒端へ流れるように入り込んだので、寺の僧らはまた驚き怖れた。やがて雲も収まり、空も明るくなつたので、かの軒の下にあつまつて眺めると、土龍は元の通りに帰っていたが、その鱗も角もみな一面に湿ぬれているのを発見した。

その以来、龍の再び抜け出さないように、鉄の鎖くさりをもつて繋いで置くことにした。早魃かんばつのときに雨を祈れば、かならず奇特きどくがあると伝えられている。

阿弥陀仏

宣城郡せんじょうぐん、当塗とうとの民に劉成りゅうせい、李暉りきの二人があつた。かれらは大きい船に魚や蟹かにのたぐいを積んで、呉ごや越えつの地方へ売りに出ていた。

唐の天寶てんぼう十三年、春三月、かれらは新安しんあんから江を渡つて丹陽郡たんようぐんにむかい、下查浦かさほというところに着いた。故郷の宣城を去

る四十里（六丁一里）の浦である。日もすでに暮れたので、二人は船を岸につないで上陸した。

そこで、李は岸の人家へたずねて行き、劉は岸のほとりにとどまつてみると、夜は静かで水の音もひびかない。その時、たちまち船のなかで怪しい声がきこえた。

「阿弥陀仏、阿弥陀仏」

おどろいて透かして視ると、一尾の大きい魚が船のなかから鬚ひげをふり、首をうごかして、あたかも人の声をなして阿弥陀仏を叫ぶのであった。劉はぞつとして、蘆あしのあいだに身をひそめ、なおも様子をうかがっていると、やがて船いっぱいの魚が一度に跳ねまわつて、みな口々に阿弥陀仏を唱え始めたので、劉はもう堪たま

らなくなつて、あわてて船へ飛び込んで、船底にあるだけの魚を手あたり次第に水のなかへ投げ込んだ。

全部の魚を放してしまつたところへ、李が戻つて来た。彼は劉の話を書いて大いに怒つた。

「ばかばかしい。おれたちは今夜初めてこの商売をするのじゃあねえ。魚なんぞが化けて堪まるものか」

劉がいかに説明して聞かせても、李は決して信じなかつた。商売物の魚をみんな捨ててしまつてどうするのだと、彼は激しく劉に食つてかかるので、劉もその言い訳に困つて、とうとう李の損失だけを自分がつぐなうことにした。そうになると、剩あますところは僅かに百錢に過ぎないので、劉はその村で荻おぎ十余束を買い込み、

あしたの朝になったら船に積むつもりで、その晩は岸のほとりに横たえて置いた。

さて翌朝になって、いよいよそれを積み込もうとすると、荻の束たばがひどく重い。怪しんでその束を解いてみると、繻さしになっている銭ぜに一万五千を発見した。それには「汝に魚の銭を帰す」と書いてあった。劉はますます奇異の感を深うして、瓜洲かしゅうに僧侶をあつめて読経をしてもらった上に、かの銭はみな施して帰った。

柳將軍の怪

東洛とうらくに古屋敷があつて、その建物はすこぶる宏壯であるが、

そこに居る者は多く暴死ぼうしするので、久しく鎖とぎされたままで住む者もなかつた。

唐の貞元ていげん年中に盧虔ろけんという人が御史ぎよしに任ぜられて、宿所を求めた末にかの古屋敷を見つけた。そこには怪異があるといつて注意した者もあつたが、盧は肯きかなかつた。

「妖怪があらわれたらば、おれが鎮めてやる」

平氣でそこに移り住んで、奴僕しもべどもはみな門外に眠らせ、自分は一人の下役人と共に座敷のまん中に陣取つていた。下役人は勇悍うかんにして弓を善よくする者であつた。

やがて夜が更けて来たので、下役人は弓矢をたずさえて軒下に出ていると、やがて門を叩く者があつた。下役人は何者だとたず

ねると、外では答えた。

「柳將軍りゅうじょうから盧君に書面をお届け申す」

言うかと思うと、一いつぶく幅の書がどこからとも知れずに軒下へ舞い落ちた。それは筆をもつて書いたもので、字画じかくも整然と読まれた。その文書の大意は——我はここに年久とししく住んでいて、家屋門戸もんこみな我が物である。そこへ君が突然に入り込んで済むと思うか。もし君の住宅へ我々が突然に踏み込んだら、君もおそらく捨てては置くまい。左様な不法を働いて、君はたとい我を懼おそれずと誇るとも、省かえりみて君のところに恥じないであろうか。君はみずから悔い改めて早々に立ち去るべきである。小勇たのを恃んで大敗はじの辱はじを蒙こうむるなかれ。——

このいかめしい抗議文をうけ取って、盧はまだ何とも答えないうちに、その紙は灰のごとくにひらひらと散ってしまった。つづいて又、物々しく呼ぶ声がかきこえた。

「柳將軍、御意を得申す」

忽然として現われ出でたのは、身のたけ数十尋（一尋は六尺）

もあろうかと思われる怪物で、手に一つの瓢をたずさえて庭先に突つ立った。下役人は弓を張って射かけると、矢は彼の手にある瓢にあたったので、怪物はいったん退いてその瓢を捨てたが、更にまた進んで来て、首を俯してこちらの様子を窺っているらしいので、下役人は更に二の矢を射かけると、今度はその胸に命中したので、さすがの怪物も驚いたらしく、遂にうしろを見せておめ

おめと立ち去った。

夜が明けてから彼の来たらしい方角をたずねると、東の空き地に高さ百余尺の柳の大樹たいじゆがあつて、ひと筋の矢がその幹に立っていたので、いわゆる柳將軍の正体はこれであることが判つた。それから一年あまりの後に家屋の手入れをすると、家根瓦やねの下から長さ一丈ほどの瓢を発見した。その瓢にもひと筋の矢が透つていた。

黄衣婦人

唐の柳宗元りゆうそうげん先生が永州えいしゆうの司馬しばに左遷される途中、荊けいも

門んを通過して馭舎に宿ると、その夜の夢に黄衣の一婦人があらわれた。彼女は再拝して泣いて訴えた。

「わたくしは楚水そすいの者でございしますが、思わぬ禍いに逢いまして、命も朝ちようせき夕せきに迫つて居ります。あなたでなければお救い下さることは叶いません。もしお救い下されば、長く御恩を感謝するばかりでなく、あなたの御運をひるがえして、大臣にでも大将にでも御出世の出来るように致します」

先生も無論に承知したが、夢が醒めてから、さてその心あたりがないので、ついそのままにしてまた眠ると、かの婦人は再びその枕元にあらわれて、おなじことを繰り返して頼たのんで去つた。

夜が明けかかると、土地の役人が来て、荊州の帥そつがあなたを御

招待して朝飯をさしあげたいと言った。先生はそれにも承知の旨を答えたが、まだ東の空が白みかけたばかりであるので、又もやうとうとと眠っていると、かの婦人が三たび現われた。その顔色は惨として、いかにも危難がその身に迫っているらしく見えた。

「わたくしの命はいよいよ危うくなりました。もう半ときの猶予もありません。どうぞ早くお救いください。お願いでございます」

一夜のうちに三度もおなじ夢を見たので、先生も考えさせられた。あるいは何か役人らのうちに不幸の者でもあるのかと思つた。あるいは今朝の饗応について、何かの鳥か魚が殺されるのではないかとも思つた。いずれにしても、行つてみたら判るかも知れないと思つたので、すぐに支度をして饗宴の席に臨んだ。そうして、

主人にむかつてかの夢の話をする、彼も不思議そうに首をかたむけながら、ともかくも下役人を呼んで取調べると、役人は答えた。

「実は一日前に、大きいこうぎよ黄魚（石首魚いしもち）が漁師の網にかかりましたので、それを料理してお客さまに差し上げようと存じました
が……」

「その魚はまだ活かしてあるか」と、先生は訊いた。

「いえ、たった今その首を斬りました」

先生は思わずあつと言った。今更どうにもならないが、せめてもの心ゆかしに、その魚の死骸を河へ投げ捨てさせて出発した。

その夜の夢に、かの黄衣の婦人が又もや先生の前にあらわれた

が、彼女には首がなかつた。それがためか、先生は大臣にも大将にもなれず、ついに柳州の刺史をもつて終つた。

玄陰池

太原たいげんの商人に石憲せきけんという者があつた。唐の長慶ちやうけい二年の夏、北方へあきないに行つて、雁門関がんもんかんを出た。時は夏の日盛りで、旅行はすこぶる難儀であるので、彼は路ばたの大樹の下に寝ころんでいるうちに、いつかうとうとと眠つてしまつた。

たちまちにそこへ一人の僧があらわれた。かれは褐かつしよく色の法こ衣ろもを着て、その顔も風体ふうていもなんだか異様にみえたが、石せきにむか

つて親しげに話しかけた。

「われわれは五台山の南に廬いおりを構えていた者でござるが、そのあたりは森も深く、水も深く、塵俗じんぞくを遠く離れたところでござれば、あなたも一緒にお出でなさらぬか。さもないと、あなたは暑さにあたって死にましようぞ」

実際暑さに苦しんでいるので、石はその言うがままに誘われてゆくと、西のかた五、六里のところにも果たして密林があつて、大勢の僧が水のなかを泳ぎまわっていた。

「これは玄陰池げんいんちといい、わが徒はここに水浴して暑気を凌ぐの
でござる」

僧はこう説明して、彼を案内した。石はそのあとに付いて池の

まわりをめぐるっているうちに、ふと気の付いたのは大勢の僧の顔がみな一様で、どの人の眼鼻も少しも異ことなつていないことであつた。やがて日が暮れかかると、僧はまた言った。

「お聴きなされ、衆僧がこれから梵ぼんおん音を唱え始めます」

石は池のほとりに立って耳をかたむけていると、たちまちに水中の僧らが一斉に声をそろえて、なにか判わからない梵音を唱え出した。その声が甚だ騒々しいと思つていると、一人の僧が水中から手を出して彼を引いた。

「あなたも試しにはいつて御覽ごらんなされ。決して怖いことはござらぬ」

引かるるままに彼は池にはいつていると、その水の冷たいこと

氷のごとく、思わずぞつと身ぶるいすると共に、半日の夢は醒めた。彼はやはり元の大樹の下に眠っていたのである。しかしその衣服はびしょ湿ぬれになっていて、からだには悪寒さむけがするので、彼は早々にそこを立ち去つて、近所の村びとの家に一夜を明かした。

翌日は気分も快よくなつたので、きのうの通りにあるき出すと、路ばたに蛙かわずの鳴く声がそうぞうしくきこえた。それがかの僧らのいわゆる梵音に甚だ似ているので、彼は俄かに思い当ることがあつた。夢のうちの記憶をたどりながら、五、六里ほども西の方角へたずねて行くと、そこには深い森もあり、大きい池もあつた。池のなかにはたくさんの蛙が浮かんでいた。

「坊主の正体はこれであつたか」

彼はその蛙を片端から殺し尽くした。

鼠の群れ

洛陽らくように李氏りしの家があつた。代々の家訓で、生き物を殺さないことになつていたので、大きい家に一匹の猫をも飼わなかつた。鼠を殺すのを忌むいが故である。

唐の宝応ほうおう年中、李の家で親友を大勢よびあつめて、広間で飯を食ふことになつた。一同が着席したときに、門外に不思議のことことが起つたと、奉公人らが知らせて来た。

「何百匹という鼠の群れが門の外にあつまつて、なにか嬉しそ

に前足をあげて叩いて居ります」

「それは不思議だ。見て来よう」

主人も客も珍しがってどやどやと座敷を出て行つた。その人びとが残らず出尽くしたときに、古い家が突然に頹れ落ちた。かれらは鼠に救われたのである。家が頹れると共に、鼠はみな散りぢりに立ち去つた。

陳巖の妻

舞陽ぶようの人、陳巖ちんがんという者が東呉とうごに寓居ぐうきよしていた。唐の景けいり龍りゆうの末年に、かれは孝廉こうれんにあげられて都へゆく途中、渭南いなんの

道で一人の女に逢った。かれは白衣はくいをつけた美女で、袂たもとをもつて口を被おおいながら泣き叫んでいたのである。

見すごしかねてその子細をきくと、女は泣きながら答えた。

「わたくしは楚その人で、侯こうという姓の者でございます。父はころぎしの高い人物として、湘楚しょうそのあいだに知られて居りましたが、山林に隠れて富貴榮達ふつきえいたつを望みませんでした。しかし沛国はいの劉りゅうという人とは親しい友達でありまして、その関係からわたくしはその劉家へ縁付えんづくことになりました。それから丁度十年になりました、自分としてはなんの過失あやまちもないつもりで居りますのに、夫は昨年から更に盧氏ろの娘を娶めとりましたので、家内に風波が絶えません。又その女が気の強い乱暴な生まれ付きで、わたくしのよ

うな者にはしよせん同棲はできません。そんなわけで、逃げ出したような、逐い出されたような形で、劉家を立ち退いたのでございますが、どこへ行くという目的めあてもないので、こうして路頭ろしうに迷っているのです。ごさいます」

陳は律義りちぎ一方の人物であるので、初対面の女の訴えることをすべて信用してしまった。なにしろ行く先がなくては困るであろうと、一緒に連れ立って行くうちに、いつか夫婦のような関係が結ばれて、都へのぼつて後も永崇里えいそうりというところに同棲していた。然るにこの女、最初のあいだは大層つましやかであつたが、だんだんに乱暴の本ほん性しやうをあらわして、時には氣ちがいのようになつて我が夫に食つてかかることもあるので、飛んだ者と夫婦に

なつたと、陳も今さら悔んでいた。

ある日、陳が外出すると、その留守のあいだに妻は夫の衣類をことごとく庭先へ持ち出して、みならずたに引き裂いたばかりか、夕方になって陳が戻って来ると、彼女は門を閉じて入れないのである。陳も怒って、門を叩き破って踏み込むと、前に言ったような始末であるので、彼はいよいよ怒った。

「なんで夫の着物を破ってしまったのだ」

その返事の代りに、妻は夫にむしり付いた。そうして、今度はその着ている物をむやみに引き裂くばかりか、顔を引つ掻く、手に食いつくという大乱暴に、陳もほとほと持て余していると、その騒動を聞きつけて、近所の人や往来の者がみな門かどぐち口にあつま

つて来た。そのなかに郝居士かくこじという人があつた。かれは邪を攘はらい、魔を降くだすの術をよく知っていた。

居士は表から女の泣き声を聞いて、あたりの人にささやいた。

「あれは人間ではない。山に棲む獣けものに相違ない」

それを陳に教えた者があつたので、陳は早速に居士を招じ入れると、妻はその姿をみて俄かに懼れた。居士は一紙の墨符ぼくふを書いて、空くうにむかつてなげうつと、妻はひと声高く叫んで、屋根瓦がわらの上うへに飛びあがつた。居士はつづいて一紙の丹符たんぷをかいて投げつけると、妻は屋根から転げ落ちて死んだ。それは一匹の猿であつた。その後、別に何の祟りもなかつたが、陳はあまりの不思議に渭南をたずねて、果たしてそこに劉という家があるかと聞き合わせ

ると、その家は郊外にあった。主人の劉は陳に向つてこんな話をした。

「わたしはかつて弋陽よくようの尉じようを勤めていたことがあります。その土地には猿が多いので、わたしの家にも一匹を飼っていました。それから十年ほど経つて、友達が一匹の黒い犬を持って来てくれたので、これも一緒に飼つておくと、なにぶんにも犬と猿とは仲が悪く、猿は犬に咬かまれて何処へか逃げて行つてしまいました」

李生の罪

唐の貞元年中に、李生りせいという者が河朔かきくのあいだに住んでいた。

少しく力量がある上に、俠客肌の男であるので、常に輕薄少年らの仲間にはいつて、人もなげにそこらを横行していた。しかも二十歳たちを越える頃から、俄かにこころを改めて読書をはげみ、歌詩をも巧みに作るようになった。

それから追いおいに立身して、深州しんの録事参軍ろくじさんぐんとなつたが、風采も立派であり、談話も巧みであり、酒も飲み、鞠まりも蹴る。それで職務にかけては廉直れんちよくといふのであるから申し分がない。州の太守も彼を認めて、将来は大いに登庸とうようしようとも思つていた。

その頃、成徳軍せいとくぐんの帥そつに王武俊おうぶしゆんという大将があつた。功を恃たのんで威勢を振うので、付近の郡守はみな彼を恐れていると、ある

時その子の士真ししんをつかわして、付近の各州を巡検させることになつて、この深州へも廻つて来た。深州の太守も王を恐れている一人であるので、その子の士真に対しても出来るだけの敬意を表して歓迎した。しかし迂闊うかつな者を酒宴の席に侍らせて、酒の上から彼の感情を害すような事があつてはならないという遠慮から、すべての者を遠ざけて、酒席の取持ちは太守一人が受持つことにした。それが士真の気になつて、さすがに用意至れり尽くせりと喜んでいたが、昼から夜まで飲み続けているうちに、太守ひとりでは持ち切れなくなつて来た。士真の方でも誰か變つた相手が欲しくなつた。

「今夜は格別のおもてなしに預かつて、わたしも満足した。しか

しあなたと二人ぎりでは余りに寂しい。誰か相あいきやく客を呼んで下さらんか」

「何分にもこの通りの偏土へんどでござりまして……」と、太守は答えた。「お相手になるような者が居りません。しいて探しますれば、録事参軍の李と申すものが、何か少しはお話が出来るかとも存じますが……」

それを呼んでくれというので、李はすぐに召出された。そうして、酒の席へ出て来ると、土真の顔色は俄かに変った。李は行儀正しく坐に着くと、土真の機嫌はいよいよ悪くなった。太守も不思議に思つて、ひそかに李の方をみかえると、彼も色蒼さうざめて、杯を執とることも出来ないほどに顛くるえているのである。やがて土真

は声を厲はげしゆうして、自分の家来に指図した。

「あいつを縛つて獄屋につなげ」

李は素直に引つ立てられて去ると、土真の顔色はまたやわらいで、今まで通りに機嫌よく笑いながら酒宴を終った。太守はそれで先ずほつとしたが、一体どういうわけであるのか、それがちつとも判らないので、獄中に人をつかわしてひそかに李にたずねさせた。

「お前の礼儀正しいのは、わたしもふだんから知っている。殊に今夜はなんの落度もなかったように思われる。それがどうして王君の怒りに触れたのか判らない。お前に何か思い当ることがあるか」

李はしばらく啜り泣きをしていたが、やがて涙を呑んで答えた。「因果応報いんがという仏氏の教えを今という今、あきらかに覚りました。わたくしの若いときは放蕩無頼ほうとうぶらいの上に貧乏でもありましたので、近所の人びとの財物を奪い取った事もしばしばあります。馬に乗り、弓矢をたずさえ、大道だいどうを往来して旅びとをおびやかしたこともあります。そのうちに或る日のこと、一人の少年が二つの大きい囊ふくろを馬に載せて来るのに逢いました。あたかも日が暮れかかって、左右は断崖絶壁のところであるので、わたくしはかの少年を崖から突き落して、馬も囊も奪い取りました。家へ帰って調べると、囊のなかには綾絹あやぎぬが百余反たんもはいつていましたので、わたくしは思わぬ金儲けをいたしました。それを機会に悪あくぎ

行^{よう}をやめ、門を閉じて読書に努めたお蔭で、まず今^{こんにち}日の身の
上になりましたが、数えてみるとそれはもう二十七年の昔になり
ます。昨夜お召しに因つて王君の前に出ますと、その顔^{かお}容^{かたち}が
二十七年前に殺したかの少年をその儘^{まま}であるので、わたくしも実
におどろきました。王君がむかしの罪を覚えていられるかどうか
は知りませんが、わたくしとしては王君に殺されるのが当然のこ
とで、自分も覚悟しています」

太守はその報告を聞いて驚嘆していると、士真は酒の酔いが醒
めて、すぐに李の首を斬つて来いと命令した。太守は命乞いをす
るすべもなく、その言うがままに李の首を渡すと、彼はその首
をみてこころよげに笑っていた。

「自分の部下にかような罪人をいだしましたのは、わたくしが重々の不行き届きでございますが、一体かれはどういうことで御機嫌を損じたのでございましょうか」と、太守はさぐるように訊いてみた。

「いや、別に罪はない」と、土真は言った。「ただその顔を見るとなんだか無暗むやみに憎くなつて、とうとう殺す気になつたのだ。それがなぜであるかは自分にもよく判わからない。もう済んでしまったことだから、その話は止そうではないか」

彼自身にもはつきりした説明が出来ないらしかった。太守はさらに土真の年を訊くと、彼はあたかも三十七歳であることが判つたので、李の懺悔の嘘ではないのがいよいよ確かめられた。

黒犬

唐の貞元年中、大理評事を勤めている韓かんという人があつて、西河郡せいかにの南に寓居していたが、家に一頭の馬を飼っていた。馬は甚だ強い駿しゅん足そくであつた。

ある朝早く起きてみると、その馬は汗をながして、息を切つて、よほどの遠路をかけ歩いて来たらしく思われるので、厩うまやの者は怪しんで主人に訴えると、韓は怒つた。

「そんないい加減のことを言つて、実は貴様がどこかを乗り廻したに相違あるまい。主人の大切な馬を疲らせてどうするのだ」

韓はその罰として厩の者を打った。いずれにしても、厩を守る者の責任であるので、彼はおとなしくその折檻せつかんを受けたが、明るる朝もその馬は同じように汗をながして喘あえいでいるので、彼はますます不思議に思つて、その夜は隠れてうかがっていると、夜がふけてから一匹の犬が忍んで来た。それは韓の家に飼っている黒犬であつた。犬は厩にはいつて、ひと声叫んで跳おどりあがるかと思つと、忽ちに一人の男に變つた。衣服も冠もみな黒いのである。かれは馬にまたがつて傲然ごうぜんと出て行つたが、門は閉じてある、垣は甚だ高い。かれは馬にひと鞭むちくれると、駿馬しゅんめは跳おどつて垣を飛び越えた。

こうしてどこへか出て行つて、かれは明け方になつて戻つて来

た。厩にはいって、かれはふたたび叫んで跳りあがると、男の姿はまた元の犬にかえつた。厩の者はいよいよ驚いたが、すぐには人には洩らさないで猶も様子なほをうかがっていると、その後のある夜にも黒犬は馬に乗って出て、やはり暁け方になって戻って来たので、厩の者はひそかに馬の足跡をたずねて行くと、あたかも雨あがりの泥がやわらかいので、その足跡ははつきりと判つた。韓の家から十里ほどの南に古い墓があつて、馬の跡はそこに止まっているので、彼はそこに茅かやの小家を急造して、そのなかに忍んでいることにした。

夜なかになると、黒衣の人が果たして馬に乗って来た。かれは馬をそこらの立ち木につないで、墓のなかにはいって行つたが、

内には五、六人の相手が待ち受けているらしく、なにか面白そうに笑っている話し声が洩れた。そのうちに夜も明けかかると、黒い人は五、六人に送られて出て来た。褐色の衣服を着ている男がかれに訊いた。

「韓いえの家の名簿はどこにあるのだ」

「家うちの砧きぬたいし石の下にしまつてあるから、大丈夫だ」と、黒い人は答えた。

「いいか。気をつけてくれ。それを見付けられたら大変だぞ。韓の家の子供にはまだ名がないのか」

「まだ名を付けないのだ。名が決まれば、すぐに名簿に記入して置く」

「あしたの晩もまた来いよ」

「むむ」

こんな問答の末に、黒い人は再び馬に乗って立ち去った。それを見とどけて、厩の者は主人に密告したので、韓は肉をあたえるふうをよそおって、すぐにかの黒犬を縛りあげた。それから砧石の下をほり返すと、果たして一いちじく軸の書が発見されて、それには韓の家族は勿論、奉公人どもの姓名までが残らず記入されていた。ただ、韓の子は生まれてからひと月に足らないので、まだその字あざなを決めていないために、そのなかにも書き漏らされていた。

一体それがなんの目的であるかは判らなかつたが、ともかくもこんな妖物をそのままにして置くわけにはゆかないので、韓はそ

の犬を庭さきへ牽き出させて撲殺した。奉公人どもはその肉を煮て食ったが、別に異状もなかった。

韓はさらに近隣の者を大勢駆り集めて、弓矢その他の得物をたずさえてかの墓を発かせると、墓の奥から五、六匹の犬があらわれた。かれらは片端からみな撲殺されたが、その毛色も形も普通の犬とは異っていた。

神

俗に伝う。人が死んで数日の後、柩のうちから鳥が出る、それをといるという。

太和年中、鄭生ていせいといふのが一羽の巨おおきい鳥を網で捕つた。色は蒼あおく、高さ五尺余、押えようとすると忽ちに見えなくなつた。里さとびとをたずねて聞き合わせると、答える者があつた。

「ここらに死んで五、六日を過ぎた者があります。うらない者の言うには、きようは、がその家を去るであらうと。そこで、忍んで伺つていますと、色の蒼い巨きい鳥が棺の中から出て行きました。あなたの網に入ったのは恐らくそれでありましょう」

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社文庫、光文社

1994（平成6）年4月20日初版1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

中国怪奇小説集

宣室志（唐）

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>